副会長就任にあたって　①

副会長理事　才藤　純一

この度、高田新会長のご英断により、副会長として日臨技に参画する事になりました。新会長と虚心坦懐に話し日臨技の業務執行は「鬼になってくれ」との要望ですので、私も胆力をもって臨む覚悟であります。

優先事項は基盤となる組織体制の新構築です。私が日臨技に参画したのは 14 年前で、当時の日臨技は研修所設立構想が燻っていました。日臨技会員管理もままならず、臨床検査基準値の標準化事業など具体化構想もなく、法改正も活動はしていたが行き詰まりの状況の中での船出でした。この研修所構想から日臨技会館設立への切り替え、また IT 化による JAMTIS の立ち上げ、法改正も議員連盟の設置による法改正への脱皮など、役員が共有する目的意識を持ち到達に向け夢を持って活動していた感があります。このように一人ひとりの意識改革により、基盤となる組織構築が可能になります。

昨今、情報化時代の到来により急速に進む世の移り変わりに数年来翻弄されている感がなります。聖域なき構造制度改革の中で 2000 年から 2008 年にわたって医療制度改革が行われ、医療の崩壊が叫ばれるようになりました。また、バブルが崩壊、アメリカでのサブプライムローンから端を発した金融危機、世界でも類を見ない急速な少子高齢化による医療費の増加等を背景に医療の質の向上と効率化、医療費の適正化および医療格差の解消等が課題となっています。

加えて、政権交代があり医療政策も変貌しています。平成 18 年に施行された新公益法人法による執行体制の方向転換の状況も出ております。このように技師会を取り巻く環境はいままで類を見ないほど厳しい状況であります。だからこそ、今、日臨技は大きく変わろうとしています。変わらねばならないのです。

まずは意識改革、マンネリ化した沈滞ムードからの脱却、人のためになる良い仕事の追求、人の役に立つということは何なのか、この社会貢献を実現に向けて活動を推進していく事が重要です。また、地区技師会や関連諸団体との融和を図り、技師会が創立以来目標としてきた多くの課題を、関連団体と渉外活動を通して実践してきた経緯を再度分析し、その検証に基づき、次のステップを構築することが重要です。

医療施設に於ける臨床検査室や臨床検査技師の存在が社会に与えてきた影響を考え、将来へ向けた有能な臨床検査技師育成のために関連諸団体との情報交換をもとに構築すべきと考えます。

振り返って見ると、臨床検査技師の認知は、この 50 有余年の技師会活動の中でどのくらい変化したのでしょうか。本当に世間に向けての啓発活動やアピールを現実として実施できてきたのでしょうか。技師会の執行部として、原点に戻り再構築のための事業展開が必要であると考えています。それには、執行部のみならず会員各位の意識改革に基づく真剣な応援が必要です。

また、技師会会員相互の信頼関係の構築と構成員の加入増加による組織を支えるハード面やソフト面の早急な再構築が必要になってきます。臨床検査技師にとり魅力ある技師会となることが最も重要課題であり、多くの考えを持った技師が集まり、臨床検査技師の理想の姿について討論する場を作ることが基本です。

技師会執行部として“臨床検査道”、つまり社会貢献を根ざす医療従事者としての道徳観念を含めた理想像を真剣に考え、会員の和の中よりニューリーダーの育成、将来に向けた基本方針や事業展開を推進することです。このような課題に対する実践的かつ具体的な事業展開をすることをお約束します。

重要なことは、過去を学び、過去にとらわれることなく将来に向けての施策を、固定概念より脱却した事業展開を推進し、結果、会員相互の人間関係の構築ができれば本望です。

私は、いま貪欲に多くの種を播きたいのです。なぜなら、自然は播いたものしか刈り取ることができないのです。そこに近道はないのです。

副会長就任にあたって　②

副会長理事　米坂　知昭

平成 22・23 年度の副会長を務めさせて頂きます米坂です。宜しくお願い申し上げます。

2 年間は長いようで短いと常々実感しておりましたので、気を引き締め心して責務を全うするよう頑張る所存でございます。

今、検査技師に必要なことは、当たりまえで重要な「教育」です。その中身は卒前卒後の臨床検査技師教育、検査研究部門、高度教育、海外研修、医学検査学会等が含まれます。選挙の際にも掲載致しましたが、改めて抱負として掲載させて頂きます。

検査研究部門に関する人員数や委嘱業務内容等の問題点を明確にし、部門構成を含めた見直しや地区推薦部門員による再編を図り、現状に即した体制を構築する必要を感じています。

日臨技の各研究班が解体されると同時に新たな検査研究部門が構築され効果は得られましたが、いまだ多くの問題があります。特に部門員の絶対数が少ないことから、研修事業内容や各都道府県への依頼の仕方等を含め連携の取りにくい状況となっています。整備すべきポイントは、「検査研究部門」は研修会開催部門ではありません。日臨技の直轄研究部門として役割を果たす必要があります。

日臨技の会員は各都道府県の会員であり、時として日臨技会員としての意識の乖離が生じることもあります。これはこれまでの組織体制と運営に起因する部分が多く、会員の声が反映され計画的で自主性の高い研修会を実施することで意識の高揚を図れるような仕組み作りが肝要と考えます。

卒前･卒後教育に関する関係方面との協議等含め、平成 7 年に設置された臨床検査技師教育制度検討員会を更に発展させた新たな会合、若しくは協議会を設立させ文部科学省・厚生労働省等と臨床検査技師育成ならびに生涯学習指導に関する方向性を検討することも必要でしょう。

次世代を担う臨床検査技師を目指す若者に対して教育施設との協議は重要な役割があると考えます。これまでも総会において学校教育に関し指定校・認定校に関する意見が出されていますが日臨技として未だ何の対応もできていません。医学の一部分として発展してきた臨床検査ですが、将来、臨床検査学としての学問体系に発展できれば、医学部や看護学部と共に臨床検査学部も夢ではないと考えます。

日臨技は職能団体として行政との協議を中心的に進めるべきであり、その体制を組織化することが必要です。第 3 次マスタープランには既に盛り込まれておりましたが進展していないのが実情です。見直すべき点は修正し即座に実行すべき点は対応すべきと考えます。

会員各自の研修をサポートするため、ｅ･ラーニングによる研修環境を 3 段階位のレベルで充実させることで研修機会の均等性を諮り、より利用価値の高いものへと発展させる。

医療系の他団体やアカデミックな大学等でもすでに実施しているようにｅ･ラーニングは高度情報化社会において重要なツールです。大都市圏での研修に各地の会員が毎回参加することは実際に不可能であり、これらの是正を図ることが必要です。各部門における研修内容や特別企画の講演会等のライブラリーを整備するともにアクセス環境の整備を推進し、全国会員の研修の機会均を図る必要があると考えます。

以上、2 年間の任期中に全てをやり遂げることは困難ですが、次世代への継承により達成できることも多いと思います。

スローガンや総論だけの美辞麗句を並べれば、文章は美しくできます。具体的な政策・施策、各論にまで踏み込むと読み辛い文章になると言われています。

「東大からの人／東大までの人」という言辞を持ち出すまでもなく、「事を具現するために副会長に名乗りを上げた」という精神を忘れずに精進する所存です。